

## 南インド・トダ族の現状と問題点

著者	奈良 毅
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	39
ページ	287-292
発行年	2003-06-30
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00001922">http://doi.org/10.15021/00001922</a>

## 南インド・トダ族の現状と問題点

奈良 毅

トダ族の人々は、自分達の母語であるトダ語と自分達の居住する州の公用語であるタミル語とを話すほぼ完全な二言語使用者（バイリンガル）であるが、まだ幸いなことに家族同士はトダ語で会話をするので、今すぐ消滅する危険性はないと思う。しかし、子供達が公立の学校に通いだしたり、家族の一員が家を離れ他の地域で生活を始めると、ほとんどトダ語を使う機会がなくなるため、日常の使用言語がタミル語に切り替わってしまう危険性が大きいにある。

トダ族の人々は、どの人もトダ語とタミル語の二つの名前を持っているが、トダ語には文字がないため、手紙を書いたり、文書に署名したりする際は、タミル文字を使ってタミル名を書かざるを得ない、という状況が存在する。トダ語には固有の文字はないものの、非常に豊かな口承文学を持っており、それを朗読できる人はまだ数人は残っている。ただその数はだんだん減ってきている。歌謡は、大人がさまざまな儀礼の際に歌うものを、子供達が何遍か聞いて自然に覚えていくといった程度である。したがって、このままの状態でなんら特別な言語保存活動がなされぬ場合、恐らくここ半世紀の間に、トダ語はひよっとしたら無くなるかもしれぬ「危険言語」である、と言えよう。

この部族は、太陽や月や山や川などの自然を始め水牛を神として礼拝する伝統的信仰をもっている。彼らは完全な肉食主義者で、水牛から絞り取るミルクやそれを精製したチーズを、周辺部に住む他の部族のつくる穀物や野菜あるいは日常生活用具と物々交換して生活している。

英国人宣教師の影響でキリスト教徒に改宗したものが200人ほどいるが、トダ族は改宗者や他の部族の人間と結婚した者を完全に自分達の社会から排除し、もはやその人間をトダ族の一員とはみなさない。

トダ族の中には、モイティーと呼ばれる婚姻集団が二つあり、しかもその二つのモイティーの間には上下関係が存在し、これらの中で婚姻関係が結ばれることは原則としてない。しかし、今から30年ほど前、それぞれのモイティーのチーフの長男と長女が結婚するという珍しいケースが発生した。これは例外中の例外と言ってもいい。私が面接調査をした母語話者（インフォーマント）は、その例外的な夫婦と、その夫の妹の3人である。

私は初め、これら3人のインフォーマントは同じ家族のメンバーなので、当然3人も同じ言語を同じ発音で話すであろうと予想して録音・記述していったのであるが、どうも奥さんの方の発音や言葉がちょっと違うことに気がつき、いろいろ原因を探ってい

くうちに、前述のような特別な婚姻関係の存在することが、図らずもわかった次第である。したがって、ひとつのモイティーだけでなく両方のモイティーの言語を調査する必要を、今は感じている。

幸いなことに、トダ語は今から約50年前、ドラビタ言語学の世界的な権威者であるエメノー教授によって、ひとりの男性インフォーマントの言語について精密な調査記述がなされ、大変りっぱな語彙集と歌謡・民話集が出版されている。ただ残念なことに、当時はまだ携帯用のテープレコーダーというものが無かったため、エメノー教授は自分の耳で聞いた通りの発音を国際音声字母 (IPA) で書き取り、それを印刷し刊行しているため、その記述がほんとうにと正しかったかどうかを、今確かめるすべはない。またいまから約10年前、シャクティヴェルという名のインド人言語学者が、このエメノー教授の発表した報告書を確認する形でもう一度トダ語を調査し、語彙集を出版している。したがって、トダ語の文献に関しては、この2人の語彙集が入手可能である。ただし、シャクティヴェル博士の語彙集も、残念ながら録音はなされていない。

今回、私と研究分担者のペリ・パースカララオ博士 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授) の2人が、再びトダ語を調査したが、50年前のエメノー教授の記述とシャクティヴェル博士の記述が正しいかどうか、まず収録語彙約4000語全部についてチェックし、同時にそれらを全部録音にとり、デジタル化した。ただ、今回調査したのは、動詞であれ名詞であれ、今まで記録されていたものに限られるため、今後は動詞の活用形や名詞の格形式の有無などを、もっと詳しく調べる必要があると考えている。

ところで配布資料の1ページ目 (表1) には、これまで行われてきたトダ語の調査資料が示されており、これからやらなければいけないものには、チェックマークがついている。次に、トダ語の音韻に関しては、4ページの表 (表2) に2種類の記述が出ているが、上の方はいわゆる IPA で表記したもので、下の方は普通の英文活字で印刷可能な形式で表記したものである。なお、4ページの下の方のコラム1, 2, 3, 4, 5, 6 (表3) について説明すると、一番左側のコラム1には、IPA を使ってエメノー教授が綴った語彙が出ているが、それと比較する意味で、我々も一応同じものを使って表記し、それをアルファベット順に並べてある。また2番目のコラムには、単語の英語の意味をのせ、3番目のコラムには、以前に調査されたものと我々の調査したものとに形態上の違いがある場合は Fr という記号を、意味上の違いがある場合は Mg という記号を出してある。したがって何も書いてない場合は、前に調べたものと我々が調べたものが同じであることを意味する。その次のコラムにある V という印は動詞を表しているが、動詞の活用形と用法を今後徹底的に調べたいと思っている。

その次の4番目のコラムの番号は、データベース用に付けた番号であり、電算機を使ってインターネットでアクセスする場合の便利さを考えてつけたものである。最後の

表1 トダ語の調査資料

Material	Status
Impressionistic phonetic analysis	Available mostly in: Emeneau (1984), and also in: Sakthivel (1976)
Impressionistic and instrumental phonetic analysis	Available in: Shalev, Ladefoged and Bhaskararao (1994); and in: Spaji, Ladefoged and Bhaskararao (1996)
Grammatical analysis	Available mostly in: Emeneau (1984), and also in: Sakthivel (1977)
Texts	Available in: Emeneau (1984)
Songs	Available in: Emeneau (1971)
Lexicon containing basic vocabulary	✓ Needs to be compiled
Good quality sound recordings of words, texts and their transcription	✓ Need to be made
Detailed vocabulary	✓ Needs to be compiled
Good quality still and video recordings of various cultural items and events	✓ Need to be made
Evolving a writing system	✓ Needs to be prepared

表2 トダ語の表記法

Vowels

	FU	FR	CR	CU	BU	BR
High	i i: i ii	ü ü: u, uu,			ī ī: i ii,	u u: u uu
Mid	e e: e ee		ō ō: o, oo,			o o: o oo
Low				a a: a aa		

Consonants

	Labial	Dental	Denti-Alveolar	Alveolar	Palato-Alveolar	Retroflex	Velar
Stops	p b p b	t d t d	c z c dz	t̪ d̪ t, d,	č j c, j	ʈ ɖ t. d.	k g k g
Nasals	m m			n n		ɳ n.	
Fricatives	f f	θ th	s s	ʃ s,	ʃ sh	ʂ s.	x x
Trills		r r		ɾ r,		ɻ r.	
Approximants					y y		w w
Laterals				ɭ l hl l		ɻ l hl. l.	

表3 トダ語の研究状況

Column 1	Column 2	Column 3	Column 4	Column 5	Column 6
Toda word in phonemic transcription	Its meaning in English	Variation from previously published material: <b>Fr</b> = part or whole of the form provided here differs from the one in the previously published materials; <b>Mg</b> = part or whole of the meaning provided here differs from the one in the previously published materials	"V" in this column indicates that the item is a verb	The number assigned to the item in the database	The word in computer input Qwerty spelling

右端にあるコラムには、コンピューターに入力する際に便利な記号を出してある。これには、転換表ができており、この形で入力されたのは直ちに一番左端の形に自動的に出るようになっている。なお、リストの6ページ（以下省略）には、トダ語のアルファベット順に語彙が並んでおり、73ページには、トダ語の逆引き辞書、つまり語尾の形式によって配列された語彙集が出ている。なぜ逆引き辞書が必要かと言うと、単語を更に形態素に分析する際に役立つからである。それから更に、141ページには、英語の意味をアルファベット順に並べたものを出してある。

トダ語を調査していく過程で、我々はいくつかの問題点にぶつかったが、幸い、優秀なインフォーマントに恵まれ、その熱心な協力のお陰で、そうした問題点を解決することができた。初めトダ族の中には、英語を話す人はいないだろうと予測し、タミル語の専門家を通訳兼助手として連れて行ったのだが、我々のインフォーマントになることを同意してくれた先ほどの夫婦と妹の3人は、いずれも英語を話すことができた。しかも、妹の方は言語学修士で、我々の質問の意味をすぐ理解し適切な回答を寄せてくれた。したがって、トダ語の調査研究は、これからもどんどんスムーズに進展していくことが期待できる。

ただ、もう一つやっているナハリ語の調査は、なかなか大変で、まずインフォーマントの確保が難しかった。ナハリ族はほとんどが日雇い労働者で、住居も一定していないため、同じインフォーマントにいつも面接できるという保証はない。したがって、行く度に違うインフォーマントを見つけて調査しなければならず、そのため、調査票が三つも出来、しかもインフォーマントによって収録内容が少しずつ違っている。

また、現地の研究協力者が欠かせないのは、英語ないしヒンディー語ができるインフォーマントがいればいいのだが、地方語しか話せぬインフォーマントがほとんどで、どうしても通訳が必要になるからである。

さらにインフォーマントに対する謝礼の問題がある。一応インド政府の研究者が調査を行う際、インフォーマントに支払う謝礼額というのが決まっているが、その額で喜ん

で協力してくれるインフォーマントはほとんどいない。特に外国人がいった場合は、向こうはその数倍を期待するのが常である。したがってこちらも、最初から2倍ないし3倍の謝礼を出すようにはしているのだが、あまり出しすぎると、次回に行った時にはこちらの足元を見て、さらに高い報酬額を要求してくることが多い。こちらが「いや、それはだめだ」と言うと、もう来なくなるという事態が時々起こる。

それから、機材等に関しては、日本から用意して持っていったり、現地で調達したりするわけだが、ちょっと失敗したのは、日本からバッテリーをあまりたくさん持っていかなかったことである。トダ語の発音を長時間にわたって録音した時、途中でバッテリーがなくなってしまい、現地でインド製のバッテリーを購入せざるを得なくなった。ところが、現地製のバッテリーは日本のバッテリーの5分の1の時間しかもたなかったため、100本位使ったのに、あやうく足りなくなる寸前までいったことがある。

それから、録音の場所であるが、最初はインフォーマントの家の中でやったり、こちらが泊まっているホテルに連れてきて録音したりしていたが、ナハリ語の録音の場合は、ホテルの造りも場所も悪くて、周りの騒音が激しかったため、とても録音できるような状態ではなかった。それで、タクシーを雇って1時間ほど走り、誰もいない砂漠みたいなどころへインフォーマントを連れて行き、そこにムシロを敷いてやっとな雑音の入らない状態で録音ができたということがあった。このように録音はなかなか大変で、田舎だから静かだろうと思って行くと、鶏の声が入ってしまったり、録音に適した場所を探すのは至難の業である。

とにかくこうして集めた言語音声資料を整理し、これを一応中間報告という形で公開することになっているが、ここでちょっと問題になるのは、報告書の表紙に Ministry of Education, Government of Japan という文字が入ると、日本政府のプロジェクトとしてやっている調査研究であると解釈され、日印両政府間の協定があるのかとか、インド政府の正式許可をとっているのか問い質されるという、厄介な問題が発生してしまう。それで、一計を案じ、英語ではただ「トダ語の基本語彙」(Toda Vocabulary) だけ印刷し、文部科学省の科研費でやったというのは、日本語でのみ表すという苦肉の策を考えた。

なおインフォーマントが我々の言語調査に協力してくれたお返しとして今我々2人が考えていることは、トダ語には文字がないので、トダ語を表記する適切な文字を創造して彼らに提供し、それによって彼らが自分達の民話や歌謡や手紙などを書けるようにしてやることである。トダ文字としては、変形ローマ字か、変形タミル文字が候補として考えられるが、どちらにも一長一短があり、最終判断が難しい。バイリンガルであるトダ族はタミル文字を現に知っているので、変形タミル文字のほうが覚えやすいのかも知れぬが、タミル語の発音には無声音しかないため、有声音を持ちかつドラビタ諸語の中

で一番複雑な音韻体系をもっているトダ語の発音を表すのに適切かどうかは疑わしい。ただし、古代タミル文字がこの体系にやや近いものを持っているので、現代タミル文字より古代タミル文字を復活させて提供するのも一案かもしれない。ただ、そうになるとやっぱり古代タミル語の専門家の協力が必要になってくるので、今のところ現地の研究協力者と一緒にいろいろ話し合い、どういう形がいいか検討中である。

もしトダ語に文字が出来た場合、トダ族は自分たちの物語とか、手紙をどんどん書けることとなり、文書としても残るし、子供に教育するためのテキスト作りも容易になるので、非常に便利になるのではないかと考えている。